修士論文（要旨）
2009 年 1 月

在日コリアンのアイデンティティと名前

指導　佐々木倫子　教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4019
尹　照子

目次

序章　民族の名前と多文化共生 ･･･ 1

第１章　研究の背景と目的･･･ 6
1.1　名前と生き方 ･･･ 6
1.2　名前の表象性とカミングアウト ･････････････････････････････････ 6
1.3　創氏改名 ･･･ 7
1.4　他の民族的少数者の名前 ･･･････････････････････････････････････ 8
1.5　民族的アイデンティティの保持 ･････････････････････････････････ 8

第２章　在日コリアンと名前 ･･･ 10
2.1　在日コリアンとは ･･･ 10
2.2　在日コリアンの通称名 ･･･ 10
2.3　創氏改名をひきずる在日コリアン ･･･････････････････････････････ 11
2.4　争いの回避 ･･･ 11

第３章　調査方法の概要 ･･･ 13
3.1　調査協力対象者および調査内容 ･････････････････････････････････ 13
3.2　協力者概要 ･･･ 13

第４章　調査結果の記述と分析 ･･･ 14
4.1　山内　健のフィールドノート･････････････････････････････････････ 14
4.2　権　迅野（コン・シニャ）へのインタビュー･･････････････････････ 16
4.3　朴　亜耶（パク・アヤ）へのインタビュー･･････････････････････ 22
4.4　金　良成（きむ・よしなり）へのインタビュー･･････････････････ 28
4.5　葉山　慶子のフィールドノート･･･････････････････････････････････ 32
4.6　井上　MINA（イノウエ・ミナ）のフィールドノート･･･････････････ 39

第５章　総括的考察 ･･･ 44
5.1　日本国籍剥奪の事情･･･ 44
5.2　在日コリアンの主体性論争･･･････････････････････････････････････ 45
5.3　在日コリアンの帰化問題･･･ 47
5.4　帰化と日本的な名前･･･ 48
5.5　在日コリアンの未来と使命 ･････････････････････････････････････ 49

終章　まとめと今後の課題･･･ 50

参考文献
資料

要旨

本研究は日本に在住する民族的少数者において、アイデンティティの確立、保持、継承はどのような要素、条件においてなされているかを明らかにすることを目的とする。

そのため、稿者は在日コリアンの「名前」に着目し、在日コリアンを中心としたインタビュー調査、およびその背景や要素の考察を通して、稿者自らの体験をふまえた「名前」の役割および重要性を明らかにしたいと考えた。

なぜなら、ある集団に属する人々の「名前」には、その集団の属性が表現されているのが一般的である。なぜなら人の「名前」は民族性のシンボルであり、ジェンダーや社会・文化的背景（封建的序列意識や流行や世相など）を表現しているからである。

日本で生活する外国人登録者が 200 万人を越え、国際化を求められる今日の社会状況において、外国人をあるがまま受けとめ日本社会に迎え入れる準備は順調にすすんでいると言えるのだろうか。かつてより、在日コリアンは日本への同化の結果、本名を隠す者が大多数であった。通称名の使用率が高く、「創氏改名」をひきずったまま通称名が継承され習慣化されてきたと言える。「本名にするといじめられるのではないか」と不安を感じさせている要因を改善し、日本の公立学校および実社会が、多文化と多民族の共生社会へと着実に成長していかなければならないと考える。

以上の社会的背景をもとに、本研究のテーマを「在日コリアンのアイデンティティと名前」とし、第１章においては研究の動機と課題を明らかにした。

第２章では在日コリアンが民族名と通称名の二つを使い分ける理由やその葛藤について、歴史的文化的背景を掘り下げる形で述べていった。

第３章では、ライフヒストリー調査に学んで、在日コリアンの若者を中心とした６名のケースについて、「名前」と民族的アイデンティティとの結びつきについて半構造化インタビュー調査を行ったことを述べた。

第４章はその聞き取り調査の結果の記述と考察である。名前は社会的・文化的意味や、さまざまな親の期待や願いが込められ、人が生きていくときのあり方に関わるものであるという認識を深める事例が多かった。また、事例から民族的少数者にとって民族的名前を名乗ることは、カミングアウトの意味があり、アイデンティティとのつながりが密接であることがわかった。

第５章の総括的考察では、いくつかの事例の背景として帰化問題に触れ、さらに今後を展望して在日コリアンの主体性論争について紹介した。

結論として、民族文化の象徴（シンボル）である自分の名前を否定したり自分の両親を嫌い、出自を隠したりすることは本人にとっても不幸なことである。「みんなちがってみんないい」という多文化共生の社会の実現において、学校教育の見直しと働きかけが必要であるという実感をもった。さらに、民族的アイデンティティが「呼び・名乗る」関係性によって支えられ、成長していくという仮説も、名付け、名乗り、使用を続けている多くの事例で確かめられたと考える。

本研究が、名前を通して人間相互の発展的な関係を作り出し、日本社会の多文化化を促すきっかけとなり、今後の教育実践や、家庭教育の指針となることを願っている。

参考文献

網野善彦他編（2002）『〈日本〉をめぐって一網野善彦対談集』講談社
伊地知紀子（1994）『在日朝鮮人の名前』明石書店
稲富進　編著（1985）『ムグンファの香り』耀辞舎
小熊英二（1995）『単一民族神話の起源』新曜社
小熊英二(1998)『〈日本人〉の境界』新曜社
温又柔(2007)「たった一つの、私のものではない名前」『ラディゲの方法』
　法政大学大学院司修ゼミ
梶村秀樹他編（1988）『ともに』神奈川県渉外部国際交流課
金井英樹（1995）「近代日本は、内への差別、外への侵略という政策を進めた」全国在日朝鮮人教育研究協議会ブックレット『在日朝鮮人教育入門Ⅱ』
金性済（2007）「ディアスポラとしてのザイニチから見た社会」『解放教育』2007 年 11 月号　明治図書
金英達（1980）『在日朝鮮人の帰化』共同出版印刷
高全恵星　監修（2007)、『ディアスポラとしてのコリアン』新幹社
国立国語研究所（2006）『日本語教育の新たな文脈』アルク
ゴッフマン（2001）『スティグマの社会学』せりか書房
斎藤弘子、根本厚美（2002）『国際結婚 100 家族』明石書店
佐久間孝正（2006）『外国人の子どもの不就学』頸草書房
佐々木倫子（2006）『日本語教育の新たな文脈』国語研究所編
佐藤郡衛、吉谷武志（2005）『ひとを分けるものつなぐもの』ナカニシヤ出版
載エイカ（2006）『多文化主義とディアスポラ』明石書店
田中克彦（1996）『名前と人間』岩波新書
中島智子（1995）『多文化教育と在日朝鮮人教育』全国在日朝鮮人教育協議会
原千亜（2008）「在日ミャンマー人の接触場面における社会文化管理」桜美林大学大学院修士論文
朴一（2002）『〈在日〉という生き方』講談社
朴一（2005）『「在日コリアン」てなんでんねん？』講談社
水野直樹（2008）『創氏改名』岩波新書
宮田節子、金英達、梁泰（1991）『創氏改名』明石書店
民族名をとりもどす会編（1990）『民族名をとりもどした日本籍朝鮮人 ウリ・イルム』明石書店
ミンハ（1996）『月が赤く満ちる時ジェンダー・表象・文化の政治学』みすず書房
梁知愛（2003）「脱“在日”への視点」関西大学大学院修士論文